

2023年9月24日 主日礼拝

説教題「愛する自由に向けて」ガラテヤの信徒への手紙5章13～15節

主任牧師 加藤 誠

**「兄弟たち、あなたがたは自由を得させるために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」(ガラテヤ5章13節)**

バプテストとはどのような教会なのでしょう。今から約四百年前、英国に誕生したバプテストのグループに注目するとき、そこに見えてくるのは「信徒一人ひとりが聖書を読み、語り合いながら、真のキリスト教会のあり方を追求した群れ」です。たとえばマルチン・ルターという偉大な神学者の聖書理解、教会観のもとに成立したルター派の教会と異なり、神学校を出ていない一般の信徒たちが聖霊の導きを求めて聖書を読み合う中にバプテストの教会は生まれていきました。英国国教会のお墨付きを受けた牧師が語る「教会とは／クリスチャンとは…こうあるべし」という教えに対して、信徒たちが「でも、聖書はなんとっているだろう？」と祈りながら聖書を読み、聖書的な教会のあり方を大胆に求めていったのです。

他の教派との違いとしては、①幼児洗礼をしない（本人の意思による浸礼のバプテストマ）、②各個教会が意志をもつ（加盟教派の決議よりも教会総会の決議が「上」で、牧師など教役者の招聘主体は各個教会）、③牧師も教会員の一人（牧師も総会では一票。教会員の「上」ではない）…などがバプテストの特徴といえます。

ここに見えてくるのは、一人ひとりの自由な意志、主体性の尊重です。一部の人（牧師や執事などの肩書を持つ人）がパワーをもって「こうあるべき」と他の人たちを押さえつけない。親であっても子どもに信仰を強制しない。その子が自分で「信じます」という時を待つ。教会みんなで平たく話し合い、祈り合い、教会決議を尊重する。そこには自分とは異なる賜物、異なる意見を持つ者同士、多様な人びとの間に働かれる主なる神さまへの信頼があります。

今年の夏、アメリカに移住して40年近くなる妹が久しぶりに日本に帰国し、しばらくの時を一緒に過ごしました。妹によるとアメリカは5～6何前くらいから「Me First」（わたし優先）の風潮が強くなったそうです。自分の好みを押し通し、自分と考え方が違う人とは付き合わない。「出ていけ！」「出ていかないなら、自分が出ていく！」となる。以前のアメリカは「考えの違う人、多様な人と一緒にやろう！」という優しさと寛容があったのに、これからどうなっていくのか…と心配していました。

その意味で、バプテストが大切にしてきた自由は、自分のやりたいことを押し通すための自由ではなく、異なる個性を持ったお互いを受け入れ、多様な者たちが一緒に歩むための自由なのです。そして、この自由は、今朝の聖書で使徒パウロがガラテヤの人たちに熱く語っている「隣人を愛する自由」と重なることを覚えないのです。

パウロはこの5章において、ガラテヤの人たちに「あなたがたはこの自由へと召し出されたのです」「しっかりしなさい／注意深くありなさい」と重ねて語りかけています。自由には、隣人を自由のように愛する自由と、自らの欲望を膨らませて互いを

滅ぼすことになる自由と、二つある。だから「肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」と。これは二千年前の言葉でありながら、今の私たちにもストレートに響いてくる言葉です。一つの教会を一緒に建て上げるように招かれている私たちへの言葉であり、また日本という社会を一緒に創り上げる一人ひとりに向けた言葉としても深い意味をもつ言葉だと思います。この「隣人を愛する自由」の大切さを主イエスから福音として受け取ったパウロは、この自由を生きることこそが、旧約の戒めと新約の十字架を貫く神の招きであると語るのです。

主イエスはきわめて「自由」な方でした。当時、イスラエルの人たちは「神を愛すること＝律法を守ること」と信じて疑わず、細々とした戒めにガチガチに縛られていたのですが、主イエスは「神を愛すること＝隣人を愛すること」であり、今朝のガラテヤ書で語られているように、律法全体は「隣人を自分のように愛しなさい」という一句に尽きる。だから「隣人を愛すること」と「他の戒め」が衝突した時には、躊躇なく「隣人を愛すること」を選び取る「自由」を生きられたのでした。

例えば「安息日」は神さまを礼拝する大切な日であり、一切の労働が禁じられていました。当時は、安息日に「してはならない決まり」が細々と 1500 もあり、その決まりを少しでも破ると「神さまを大切にしていない！」と厳しくとがめられたのですが、主イエスは「安息日は神さまを礼拝し、神さまの憐れみを分かち合う日」であり、「隣人を愛する自由が優先される」ことを示されました。

マタイ 12 章には、ある安息日に主イエスと弟子たちが麦畑を歩いている時に空腹を覚えた弟子が麦の穂を手で取って食べた行為を、ファリサイ派の人々が「それは安息日に禁じられている労働にあたる。けしからん！」と糾弾した話が載っています。実は旧約聖書では、他人の麦畑に入って麦の穂を食べること自体はゆるされていたのですが（申命記 23 章）、ファリサイ派の人たちは「安息日はダメだ」と弟子たちを責めたのです。それに対して主イエスは「あなたがたは、神が求めておられるのは憐みであることを知らないのか」と問われました。実は「麦の穂を口に入れて食べる」という行為ですが、麦の穂の外側の殻をはいで口の中で小一時間ほど噛み続けているとチューインガムのようなのだそうです。つまりお腹をいっぱいにする行為ではなく、空腹をまぎらわす行為なのです。そのことを考えるなら、主イエスがファリサイ派の人たちに問われたのはこういうことだったのではないかと想像します。「あなたがたは、麦の穂を口の中に入れて空腹を紛らわすほかない貧しい人たちのことをどれだけ自分と重ねて考えたことがあるのか。安息日は神さまを礼拝し、神さまの憐みを大切に分かち合う日だ。あなたたちはその安息日に一番大切な憐れみを見失っているのではないか？」と。

そのように主イエスは、「神を愛する＝決まりを守る」とことと勘違いして神さまの憐れみを見失っていた人たちに、「神さまが喜ばれるのは、私たちが隣人を愛する自由に生きること」であると教えてくださったのです。この神さまの憐れみと喜びへの招きを、今朝、主イエスの御手から大切に受け取っていきたいのです。